長峰山からの景観――そして意味するもの

安曇野市　西村　永明

長峰山は、安曇野市の東部に広がる細長い山系の里山で、北アルプスと対峙しています。一般的に考えると、どこにでも有るごく普通の低山です。しかし、一度この山に登り、山頂に立つと考えは一変します。目の前には、日本を代表する 3,000 メートル級の北アルプスが北の端から南の端までの全望約 30 キロの大パノラマが広がります。屏風の前には肥欲な安曇野、とりわけ眼下の明科は、安曇節の一節に「槍で別れた梓と高瀬、巡り合うのが押野崎」とうたわれてもいる、安曇野を潤して流れ下る三筋の川が一同に会する有名な三川合流地で、それを見渡す風光明媚な景観は息をのむほどの感動を覚えられます。

前述した西側に見える安曇野と北アルプスの景観は、常念岳を真正面に北へ大天井、燕、有明山、餓鬼、針ノ木、立山、蓮華、爺、鹿島、五龍の後ろ立山連峰、唐松から白馬三山、さらに北の小蓮華や白馬乗鞍、朝日岳とそれぞれ特徴あるピークの連峰を一望。更に北へ転じると戸隠山や妙高山、その手前に聖山、岩洲の山々、東に転ずると、小県との境の峰々、会田富士こと嘘空蔵山、青木峠、ケツ出し山こと入山、戸谷峰から南へ転ずると王ヶ頭、美ヶ原、そして天気の良い日には富士山、南アルプス、中央アルプスの 360 度の展望を堪能できます。

また、東側に目を向けてみると、県南北を結ぶ長野自動車道が山頂直下を隧道で通り抜け、東側の山のすそを走っている光景がよく見えます。かつてこの東側の領間地は、東山道、後に北国西街道が通り、文化交流の地でもありましたが、中世戦国時代には国盗りの武将が戦士道として合戦をしながら通った主要な道でした。江戸時代に入り徳川幕府による天下平定の世の中となると、人々は盛んに旅行をするようになり、善光寺参りの関西中京方面からの主要道として宿場を備えた北国西街道として発達しました。あの芭蕉も姨捨の田毎の月見、そして善光寺参りの際にこの街道を通っています。

時代が変わり明治の新政府となると、新たな移動手段である鉄道の整備が進められることになりました。そのルートは筑北から明科へ抜け、犀川筋に松本へと繋がるよう敷設されたため、この北国西街道は寂れてゆきましたが、山頂からはこの街道の道筋であった刈谷原峠から立峠までの 10 キロを全望できます。

長峰山の東山麓には、古い歴史を持つ矢ノ沢集落があります。ここは、西側光地区の一部であり、旧上川手村としての中心地田沢へ通じる尾根道があり、これを地域では光街道と言っています。これは前述した善光寺街道へ接続する道にもなっていて、江戸から明治初期の矢ノ沢の子ども達は、この道を通り長峰山を越え、田沢の学校へ通っていました。また、大人達も当時の上川手村役場や農協も田沢にあった為、この峠道約 5 キロを 1 時間程度歩いて通っていました。

とりわけ中腹の矢ノ沢山の神社は江戸後期から大正にかけて、月見の名所として人

気があり、近隣より人々が集い、月見会での句会（歌会）が催されました。現在神社には 100 枚以上の俳画額が掲げられています。

ここ長峰山のもう一つ注目すべきこととして、何万年もの昔、この地は海であったということです。日本に残る遺跡の多くは川の傍にありますが、稀にみる山の頂に存在しています。時代として、縄文、弥生、奈良、平安期の遺物が出土し、東側斜面には土器を焼いた跡も発見されています。人類が生まれ発達した縄文期に、長峰山の一つの山頂である天平（あまってら）に、山の頂部にもかかわらず人が住みついていたのは、生活を営むのに絶対必要となる水場の存在があったからです。

中世戦国時代になると、日本中で国盗り合戦が行われた不安定な時代となり、それに関連した史実が数多く存在しますが、長峰山（塔ノ原）には東信地区で勢力を張っていた海野氏の西端の戦略地の１つとして出城（山城）が造られ、海野氏の三男三郎が配されたほか、近隣にも同様の出城が造られそれぞれに海野兄弟が城主として領地の守備を行っていました。
元の長男海野太郎は本拠地東信の東御市に在し、西端の長峰山以外の出城（山城）には中信地区見守りの拠点の松本市四賀会田に次男小次郎、南側の田沢には四郎、東南の松本との境の刈谷原には五郎、そして、光には六郎を配して、睨みをきかせ守備をしていました。しかし、甲斐の武田が北へ攻め入ると共に、これらの出城（山城）はことごとく落城していきました。山里の歴史の中には、これらにまつわる話が数多く残っています。

戦後には、パルプ用に山を切り出し、その切り出した跡に唐松や赤松を植林し、紅葉等が楽しめるようになりました。隣の豊科光にある光城山の桜も、大正の始めに大正天皇が誕生した記念にと光７地区の皆さんにより植えられ桜の名所となり、上川手村消防団第一分団（光）での花見で芸子をあげての初めての花見をしたという逸話もあるように、花見が盛んに行われるようになったものです。

戦後昭和 30 年～40 年代の高度成長期となり、この長峰山の持つ森林資源や観光資源を活かすことを目的とした長峰林道（約 6700 メートル）の開設が始まり、昭和 46 年に山頂にレリーフが建立されました。ここには 50 年後（2021 年）に開封する予定のタイムカプセルが埋め込まれています。
山頂へは、東側の矢ノ沢地区からの道路整備（現 林道天平線）、そして明科からの道路（林道長峰線）、田沢からの林道城山線その他、白牧線、府生線（松本市四賀）が整備され、多くの人が手軽に登れるようになりました。
昭和 45 年５月 12 日に、歴史的な著名人（川端康成、井上靖、東山魁夷）がここに一同に会し、西山の北アルプス山麓開発に際しての提言をしています。「残したい静けさ美しさ」これは日本の宝といえる北アルプス山麓に人工的開発はいかがなものか、常に自然とマッチしなければならないことを示し、井上は、三川合流の犀川に高瀬川

が流れ込む様を絶賛、東山は「安曇野を想う」という感想を寄せ、「五月の若緑に蔽われた安曇野はなんと美しかったことか、上高地から流れ出る梓川が高瀬川と合流し犀川となって北に流れる平野の上に高く連なる北アルプスの山々常念、東天井、燕と長峰山の上で案内人の指し示す残雪の嶺々を仰ぎながら飽かず眺めたひとときが忘れられない。」との言葉を残しています。関連して地元明科高校へ「次世代担う皆さんはあの安曇野の美しさを長く伝えて下さるようお願いいたします」とも残しています。長峰山頂には「安曇野を想う…」また、明科高校には「次世代を担う…」の東山魁夷の記念碑が建てられています。

その後長峰山は徐々に手が入れられ、林道の整備、静かなる森林資源や景観資源を活かす事業を取り入れ、全国に知れ渡ることとなり、映画、テレビドラマ、その他で絶好のロケーションとして活用されています。ＮＨＫ朝の連続小説「水色の時」、「おひさま」等でもロケ地として使われましたが、とりわけフジ系で全国放映された「あの日の僕をさがして」の主人公と恋人との山頂での会話のシーンで主役の男性が「ここが僕の一番好きな景色なんだ…」とささやくシーンが放映されると、全国からわざわざカップルが訪れるようにもなりました。地元明科でも長峰山から見ることができるこの景色を知らない方が多かったのですが、林道が整備され気軽に山頂まで行くことが出来る様になり、ドラマでの放映も相まって、このすばらしき景観を知った方も多いのではないかと思います。

平成７年７月には、長峰山観光の拠点、森林体験交流センター「天平の森」がオープンするとともに、山頂展望台、マレット場なども併せて整備され、更に魅力を増しています。長峰山頂で、東山からの赤く大きな日の出、月の出、そして日の出と共にアルプスへ陽がさすモルゲンロード（雲海の上なら更に素晴らしい）、アルプスに陽が沈むサンセット（６月の田植え後の水鏡に写る様は更に素晴らしい）。アルプスを目指して飛び立つハンググライダーやパラグライダーの安曇野空中散歩。土質の良い南側畑（天平）での味の良い野菜づくり。天平の森では、400 ミリ天体望遠鏡による天体ショー観測。アルプスを見ながらの入浴や美味しいものの舌鼓。バンガローやキャンプ体験ができます。そして、山頂で永遠に愛を誓い合う「天空結婚式」も可能です。ブラスバンドや太鼓の演奏、とりわけ数名がアルプスを見ながらチロル衣装で、アルプホルンを奏でる様は絵になります。時にはオカリナの笛の音も聞こえてきます。
散歩コースの設定もされていて、光城山とのタイアップコースでは県内外から多くの方々に峰の縦走散歩などを楽しんでいただいています。東側大足から矢ノ沢の山里の生活を見ながらのコースも人気です。更に、旧国鉄篠ノ井線廃線敷ウォーキングコースとセットにしたコースなどもありますので、ぜひ一度歩いてみることをお勧めいたします。（別コース表をご覧ください）

山頂には国土地理院の国家基準二等三角点が設置され、地元民は、最近でこそ「長峰山」と言いますが、前は山頂のことを「三角点」と呼んで親しんでいました。自分

はこの山をもじってあえて「ながめやま」と呼んでいます。隣の光城山も「三等三角点」であり、安曇野の格を調整図化する上でこれら三角点は大変重要な存在です。

古代安曇野を切り開いたと言われる海人族の安曇氏。まさしくこの安曇氏から安曇野の名は出来ています。遠く九州の地から日本海を糸魚川を経てこの地に入り系統毎に住み家を構えた村上、前科、八原、高家の群であったといいます。彼らは川魚漁をして生活の糧としました。そのうち、明科の川西地区の七貴、南陸郷は、前科（さきしな）川東の潮から豊科田沢までは高家（たきべ）と言いました。[現豊科地区南部の高家と称しているものとは異なります]　そして、この明科にその安曇氏の権威の象徴の寺院があり、朱塗りの七重の塔が建ち、安曇氏が住み着いた各地から眺め崇拝することが出来たのであろうと言われています。

明科は川の向こうの筑摩の郷で安曇とは違うと別視する意見もありますが、過去の時代に遡れば、むしろ安曇野の中心は寺院を具備した明科の地であるとも言えるのではないでしょうか。（※）

安曇族の時代から 1200 年、本来の安曇野が一体となったことも自然の回帰ではないでしょうか。安曇野を切り開いた古代安曇族も眺めていたであろう長峰山頂からの安曇野の風景を見ながら、彼らはその時何と思っていたか。歴史的ロマンは尽きないのです。

※
海洋　安曇族の守護神であるわたつみの神、その社殿が穂高神社であり、その奥社が上高地明神池の脇にあり、嶺社は奥穂高岳の山頂、そして、その前方拝殿に当たるのが、塔の原の犀宮社であると言われ、これはほぼ直線で結ばれている。